

群 棲

黒井千次

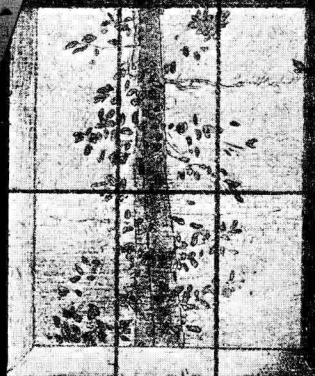
講談



群

棲

黒井千次



講談社

群ぐん 棲せい

一九八四年四月二七日 第一刷発行
一九八四年六月二五日 第二刷発行

著者——黒井千次くろい せんじ

© Kuroi Senji 1984, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三—三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二三（大代表）
振替東京八一五三〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一五〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN 4-06-200940-4 (0) (文1)

目次

オモチヤの部屋	5
通行人	31
道の向うの扉	53
夜の客	75
二階家の隣人	97
窓の中	123
買物する女達	151
水泥棒	177
手紙の来た家	201
芝の庭	227
壁下の夕暮れ	251
訪問者	279

装
幀・菊池
薫

群

棲

住宅地を南から北へと貫く一本の道がある。南に当る駅の方角から歩いて来た人は、やがて、すぐ突き当りになる短い路地が右へ折れているのを目にするだろう。

道に面した、路地の手前の角は木内家であり、先の角は滝川家である。そして木内家の奥には安永家、滝川家の奥には織田家がある。つまり、路地の入口では木内、滝川の二軒が向い合い、その奥では安永、織田の両家が対面している。

この作品は、路地をはさんでお互いに、向う二軒片隣の関係にあるこれら四軒の家を主たる舞台とする。

話は、まず路地左手奥にある織田家から始る。

オモチヤの部屋、

鳴らない時計が七時を打った。

ウツと声を詰まらせ、気忙しく動こうとするものが振子の裏側をぞよめかせて過ぎると、それで終りだ。電池を入れ替えても、脇腹を叩いても、いつか時計は声をたてなくなっていた。

日の入りは十八時五十七分の筈だが、降り出した雨のために窓の外は暗い。

天井の蛍光灯がテーブルの上に並べられた夕食を照らし出し、そのまわりに三人の家族を集めている。

茄子の鳩焼を食べるのは房夫だけである。二人の子供達は舌が痒くなる、といって手を出さない。玉葱の味噌汁があるのに、コップの水ばかり飲む。あとはトマトケチャップのかかったハンバーグステーキと、大きなガラスのボウルに盛られたレタスとトマトとグリーンアスパラガスのサラダ。赤い蓋のついたマヨネーズのビニール製容器がぼつてりと重そうだ。

真由^{まゆ}が知らずに出してしまった母親の箸だけが使われずにテーブルの隅に揃っている。細く開けられた窓の間から雨を通して裏の家のテレビの音が洩れて来る。

「地球の自転速度が速くなっているんだってさ。」

耕一が脂に光る口唇をつけてコップの水を飲んだ。食器を洗う時、あのコップの縁はクレンザー

をつけてよく磨かねばならんな。

「地球の自転速度は遅くなっているんだって。」

「わからんな。どっちなんだ。」

どちらでも構わぬといった声で返事をしながら房夫は味噌をまとった茄子を口へ運ぶ。

「地球の自転は遅くなっていたんだけど、速くなったんだ。アメリカの海軍観測所がそれをみつけたって書いてあったよ。」

「どうして海軍が。」

「遅くなったのは月の引力が海の水になにかしていたらしいんだよ。海のことだから海軍が気がついたんだろ。」

「その引力が弱くなったのか。」

「違う。地球の外側の方は内側より廻る速度が遅いらしいの。だけど、真中の方が急に動き出したから自転の速度が速くなったんだってよ。わかる？」

「わからない。それで、速くなったのか、遅くなったのか。」

房夫は自分でも原因の掴めぬまま苛立ってくる。

「速くなった。」

「遅くなる以上に速くなったんだな。」

「そうなのかな。」

耕一は食卓の上に箸の先をのろのろ廻してから急にトマトを突き刺した。

「速くなるとうなるの。」

真由が飯茶碗を置くと両手でしっかりとコップを掴み、兄の顔を見た。

「早く夜中になるのさ。」

コップを持ったまま真由は不安そうに窓の外を見る。

「速くなるといっても、一年に一秒とか、ほんのちょっぴりだよ。」

房夫は息子に向けるのとは違った口調で娘に言った。

「どんどん速くなるといいね。」

真由は父親の言葉を押し戻すように答える。

「ママが早く帰って来るもの。」

そうだね、と口では応じながら、ママがそれに気がつかなければな、と意地悪くつけ加えたくなるのを房夫は抑えた。もしも紀代子がそのことを知ったなら、地球の自転の速まり以上に自分の帰りを遅くしようとするに違いない、と思ったからだ。

「田辺さんちの桜、なくなったの知ってる？」

耕一がまたコップの水を飲んでから、唐突に言った。

「そうだよ、学校から帰って来る時、煙草をくわえたよそのおじさんが梯子にのぼって切ったよ。」

「ばか、俺が帰って来る時には根元まで無かったね。この位ずつの長さに切った木がもう門の前に並べて積んであったもの。」

「玄関の横のあの大きな桜の木か。」

「そうだよ。」

今度は二人が声を揃えて得意げに父親を見る。房夫は細く開いている窓の隙間から裏の家の暗い庭を窺う眼付になった。

「あの木は俺より年上なんだぞ。パパが真由よりずっと小さい時にもう咲いていたんだからな。」

田辺家の桜は今年も咲いていたのに、子供の頃の花盛りの様子や、道の端に白く散り積った花びらを手ですくい取った折のひんやりとした感触ばかり蘇ってくるのが不思議だ。

「どうして切ったんだ。」

房夫の声は無意識のうちに尖っている。

「知らないよ、ひとのうちだから。」

「切るなよな、全く。俺と一緒にいたものがみんななくなっちゃうじゃないか。」

「パパは子供の頃このうちに住んでいたの。」

耕一の声に微かないたわりの匂うのに気づいて房夫は苦笑する。

「このうちは耕一が生れる少し前に建てたんだ。でも、子供の時にここの土地には住んでいたぞ。」

房夫は指で足元の床を強く差した。その指は床を通して下の黴臭い土にまでときそうだった。

「ママは。」

父親と兄の話にやっと隙間をみつけて真由が割りこんで来る。

「そんな前にはまだママのことは知らないよ。ママは世田谷のうちにいたんだろ。」

「そうすると、ここはどうなっていたの。」

耕一が真由を無視して房夫に問いかける。

「古い大きなうちがあった。」

「そのうちはどうしたの。」

「壊したよ。」

「古くてぼろぼろになったから？」

「いや、うちの方はまだ大丈夫だったけど、住む人がいなくなったからね。」

「なぜ。住めるのならもったいないじゃないか。」

房夫の父の代の家への出たり入ったりや、その両親の死や、父の弟妹達との土地の分割相続にかかわる複雑な事情などについて、子供に理解出来るように説明するのはむずかしかった。

「ちょうどこのあたりが古いうちの茶の間だったかな。」

耕一の抗議に答えるかわりに、房夫は自分の坐っている場所の左右を見廻した。そのあたりの空気がじわりと身じろぎしたようだった。

「オモチャの部屋というのがあったな。」

床を這う空気の動きに唆かされて房夫は玄関へ出る半開きのドアの方に眼を向けた。

「オモチャがいっぱいあったの。」

父の眼につれられてドアを振り向いた真由が訊ねる。

「そう。六畳の間でね、右側に壁をえぐった木の棚が一面にあって、そこにイギリスにいったおじちゃんもババもオモチャをいれていた。子供部屋というわけでもなかったんだが——。」

南には庭の芝生に面した広い出窓があった。いや、出窓ではなく、木の狭い張り出しがあってその縁に手摺がついていたのだ。窓の手前には黒いシンガーミシンが置かれていた。としたら、あれは母の部屋だったのだろうか。しかし、ミシンを踏んでいつも白い布を縫っていた祖母の背中ばか

りが房夫の内に浮かび上つて来る。とすれば、祖母の部屋であつたのか。窓の外には幹が斜めに伸びている登りやすい柿の木があり、秋には小さな甘い実が枝先にかたまつてついた。

「そうだ。今の玄関だよ、オモチャの部屋は。」

房夫の声は高くなる。彼の身体は椅子の上でまっすぐ玄関の方を向く。居間からのドアの暗い陰に、柿の薄緑の葉の照り返しに溢れる外光豊かなもう一つの部屋が浮かび上つて来る。

「行ってみるか。」

房夫は突然箸を置いて立上つた。真由が慌てて椅子を降りると父親の手を掴んだ。

「どこに。」

ハンバーグの最後のかけらを口に入れた耕一が房夫を見上げる。

「オモチャの部屋。」

房夫のかわりに真由が断乎とした口振りで答えた。房夫を掴むその手に異様な力がこもっている。結局、耕一も口を動かしながら椅子を離れた。

古い家の附属物で今でもそのまま残っているものが一つだけあつた。北裏に当る田辺家との垣根に沿って半ば土に隠れながら点々と続く四角い石がそれだった。飛び石と呼ぶほど風情のあるものではなかったが、かつて裏木戸から勝手口までの細い通路に埋められていたものだった。家の者は勝手口から出ても南側の庭の芝生を巡る道を通つたので滅多に裏側の通路を使わなかったが、友達や従兄弟が遊びに来たりすると房夫達はそこを走り廻ることが屢々あつた。今よりは土の上にしつかり出ていた覚えのあるその石に房夫は下駄を突っかけて転び、別の石の縁で口唇を深く切つたりもした。いつもは庭の側から太い釘をさして閉められている勝手口の木戸を開け放しにして叱られ

たのも、裏の通路を駆け廻る時だった。

古い家を取り潰されて草だけが茂る空地となった際も、また幾年かしてその一部に房夫達が小さな家を建てる折にも、四角い石の幾つかだけは昔のままに地面から顔をのぞかせていた。だから、今も裏に並ぶ四角い石を基準にすれば、過去の家のおおよその位置の見当をつけることは出来た。それには以前から気がついていたのに、これほど真剣に昔の部屋の配置を探ろうとしなかったのはなぜなのだろう。

房夫には、黙って雨に濡れているに違いない四角い石がはっきり見えた。蘇った石に促され、北側の暗い廊下や、じめじめした風呂場や、妙な匂いのする納戸が現われて家の底を動き廻る気配がした。食卓のあるダイニングキッチンの下に、長火鉢を据えられた茶の間が沈んでいた。そうだとすると、茶の間の東南側に少し庭に突き出した形でついていたオモチャの部屋は、やはり現在の玄関となる。玄関はそれよりずっと狭いことから、オモチャの部屋の手前寄りの部分にのついている。

「まっすぐ行くと障子があつて、南側の廊下だからな。」

房夫は居間にはいるとそろそろと足を進めながら、真由に掴まれていない右手の掌を立てて障子を示した。眼を見開いた真由が大きく頷く。

「廊下には出ないで、ここの戸をあけて……。待てよ。」

房夫は居間の蛍光灯の下まで進むとそこでわざとらしく直角に左に折れてふと立停った。耕一がいつのまにか忍び足になってついて来る。

「ここの境はガラス戸だったような気がするな。そうするとオモチャの部屋は……。」

茶の間は当然畳敷なのだから、それに接するオモチャの部屋との境にガラス戸がはまっている筈はなかった。一瞬とはいえ、自分がそんな錯覚に捉われたことに房夫は驚いた。オモチャの部屋には南に面した窓の下にだけ、ニスの色を浮かせた洋風の板張りの箇所があり、その上にミシンが置かれていたのだった。そこが家中で一番明るい場所だったからかもしれない。

「ばか、障子だよ、これも。」

細い縦長の棧の、ガラスのはまっていない障子が前にたてられていた。なぜか、古い家は一間ごとに戸や障子がきっちりと閉められている。

房夫は居間から玄関に出るドアをスリッパの先で押しやってから、眼の前の見えない障子を丁寧に引き開けた。予想もしない大きなものが足の先にあった。それは横たわるのでも、蹲るのでもない不自然な姿勢で俯している。

「ここにおじいちゃんが倒れていた……。」

カーキ色のズボンを履き、襟のつかない白い長袖シャツを着た庭いじり姿のままの祖父が、微かに腰を持ちあげるようにして倒れていた。

「どうしたの。」

真由が突然動きを停めた房夫の腕にしがみつく。

「おじいちゃんはオモチャの部屋で死んだんだな。」

「ここで死んだの。」

耕一の手が房夫のもう一方の腕を後ろから掴んだ。祖父はどうしてオモチャの部屋などにはいろうとしたのだったろう。後から考えるとなかなかハイカラなところのあった祖母はその部屋でミシ